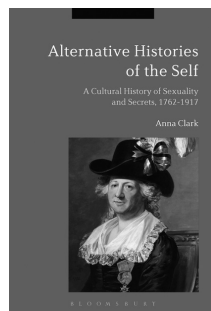


書 評

Anna Clark, *Alternative Histories of the Self:
A Cultural History of Sexuality and Secrets, 1762-1917*

(London: Bloomsbury Academics, 2017)

野田 恵子



本書は、セクシュアリティの歴史を、主体性や自己の形成の観点から、ルソーなどの思想との関連においてとらえ直そうと試みた著作である。本書は、セクシュアリティの歴史研究でありながら、その試みにおいて、日記などのナラティブを分析することで自己形成のプロセスを明らかにする一連の言説分析の研究に連なるものでもあるといえる。一般に個人の自己形成に関する言説分析は、一次史料をもとに実証的に事実を分析する歴史学とはあまり相性の良いものではないが、著者は、具体的な五人の人物の人生を追いつつ、日記や手記などの「自己語り」の言説を分析することで、個人が自己を形成するプロセスを歴史学者の観点から解き明かそうとしている。また、「自伝」ではなく、日記などの個人の「内面」を吐露する「私的なもの」を分析することで、本書では、一貫性のない、時には矛盾に満ち、分裂することさえある自己の形成過程を明らかにしようと試みられている。

本書の長い「序論」で、著者は、ルソーやアダム・スミスの思想における「自己」の概念を検討することで、五人の人物の事例研究を19世紀の思想史の文脈の中に位置づけている。特にルソーの自己に関する思想の重要性を指摘し、『告白』において提示される、他の誰とも異なる「独自の自己」や「自己の独自性」という考え方が、事例研究で取り上げられている五人の個人の自己形成においてどのような意味をもったか、彼／彼女らは自己形成のプロセスでルソーの思想にどのように依拠したのか、またそれを自己の物語に適用するようにどのように「利用した」のか、などを考察している。本書は、著者が取り上げた人物たちが、自己を解釈するためにルソーなどの思想に依拠しつつも、それをそのまま受け入れるのではなく、自ら

の都合にあわせてその思想の一部を利用し、一部を消去したり「誤読」したりしていること（著者はこれを「クイアな読み」と表現する）を指摘することで、彼／彼女らの自己形成のプロセスのダイナミズムを明らかにしている。

本書の第二章から第六章で著者が分析の対象としている五人の人物は、時代を代表するような平均的な人物でも、時代を動かす力をもった著名人でもない。彼らの共通点は、教育や資産のある特権的な階級に属しつつも、何らかの「セクシュアリティの問題」や既存の道徳や社会規範などの価値観に対して違和を抱えているということである。また、彼／彼女らは、自らが抱える違和感を説明するための思想や言説にアクセスでき、そこから自己を形成する時間的・経済的・精神的余裕のある人物たちである。その意味において、本書の事例研究で明らかにされる個人の自己形成のプロセスは、キリスト教に規定された自己や道徳のありかたが疑問に付され、新たな秩序へと移行する時代において必然的に浮上する「私は何者か」、「道徳とは何か」、「社会正義とは何か」などの問いと真正面から向き合い、その中で、自己を形成することができた先見的、かつ特権的な人々の自己形成であるといえる。とはいえ、彼／彼女らの自己のありかたは、特権階級の「お遊び」として軽視されるべきものではなく、その後の新たな時代へと向かうイギリス社会を動かす原動力となる様々な要因を開示してくれるものでもある。その意味において、本書で扱われている人物たちの事例は、20世紀へと向かう時代の過渡期にあるイギリス社会の葛藤を、個人の内面の葛藤の中から読み解くための材料も提供してくれているといえるかもしれない。

本書ではまず、ルソーの「自己」の概念に依拠し自己形成をした人物として、the Chevalière d'Eton de Beaumont（第一章）と Anne Lister（第二章）が取り上げられている。第一章でとり上げられている the Chevalière d'Eton de Beaumont は、現在では「トランスジェンダー」、あるいは精神分析学的に「異性装者／服装倒錯」と分類されるであろうフランス人の外交官の男性である。著者は、d'Eton は、「トランスジェンダー」を解釈する際に引用される「男の身体に閉じこめられた女性として真の自己」、つまり「女性的な女」になりたかったのではなく、「女」として生きながらも、当時の既存の

「女性性」を否定したのであり、その意味において、ジェンダーの境界をあいまいにしたのだという。その際に d'Eto が依拠したのが、ルソーの「独自の自己」という考え方である。「独自の自己」という概念を利用することで、既存のジェンダーの枠組みを超えながらもその厳格な枠に収まらない「独自のセクシュアリティ」を自己形成の中核に据えることができたのだと指摘されている。

第二章で取り上げられている Anne Lister は、現在では「レズビアン」と見なされる女性を性愛の対象とする上流階級の女性である。彼女もまた、d'Eto と同様に、ルソーの「誰とも異なる真の自己」という言説を引用し、既存のジェンダーや「女性性」／「男性性」の枠組みを肯定することなく、自己のセクシュアリティを自己形成の核に据えた人物である。

第三章と第四章では、上記の二人とは異なり自己のセクシュアリティに違和感を抱えておらず、その意味において、セクシュアリティが自己形成の核になる必要のない二人の男性 (Richard Johnson と James Hinton) が取り上げられている。二人とも、当時の支配階級に属する男性であり、既存の性の秩序は否定するが、いわゆる「性的マイノリティ」ではない。その意味において、セクシュアリティと自己形成の関連を主題とする本書とは直接には関係のない人物に見えるが、筆者は、ルソーの「独自の自己」という言説との関連において二人の男性の人生や自己をめぐる言説の解釈を試みている。彼らは、d'Eton や Anne Lister とは異なり、ルソーの「自己の独自性」という概念や「自己語り」を否定し、人間には「独自の内面」などというものは存在しないとみなしている。彼らはむしろそれぞれの方法で、自分の内面に収束しない、社会とのかかわりにおいて自己やセクシュアリティをとらえ、自己の問題を倫理や社会正義との関連で考えようと試みた。現在でいうところの「性的マイノリティ」でも「当事者」でもない彼らが、自己の内面の奥深くへと視線を向けなかったことは驚くべきことではないが、本書の興味深いところは、ルソーの思想を介在させることで、the Chevalier/e d'Eton de Beaumont (第一章) と Anne Lister (第二章) の「自己語り」と対照させ、セクシュアリティの問題を社会制度や倫理との関連のなかで論じているところにある。

第五章では、イギリスの性科学者として有名な Havelock Ellis の妻であ

り、「同性愛者」であったとされる Edith Ellis を取り上げている。Havelock Ellis は「同性愛者」に繋がる「性転倒 (sexual invert)」という概念を生み出したことで知られているが、彼女の妻のセクシュアリティが彼の思想の形成にどのように関係していたかとともに、Edith が、第四章で取り上げられている James Hinton や哲学者ニーチェの思想に依拠しながら、自らのセクシュアリティと「独自の自己」と倫理や社会正義の問題、また社会主義との関係性をどのように考えていたのか、などを考察している。

本書が対象とする 18 世紀末から 20 世紀初頭は、「近代」という時代の到来とともに、主体性や自己に関する認識が高まった時代でもある。「私とは何か」という問いの浮上という事実そのものが、他とは違う独自の「自己」や「個人」という概念のない時代には意味をなさないものであり、極めて時代の刻印を帯びたものである。はたして開示すべき「本当の自分」などというべきものが存在するのか、あるいは、そのような自己という存在自体が、言説によって構築された虚構ではないのか、など主体性や自己をめぐる問いは現在でも有効なものだが、近代以降、私たちは、「主体の政治」の文脈の中で行動し、それが「人権」という概念と結びつき、歴史を動かしてきたことは事実だろう。

本書が対象とするのは、セクシュアリティが自己の本質と結びつけられ、「性的自我」という概念が精神分析で語られるようになる時代でもある。そのような時代において、著者は、ルソーの思想に依拠しつつ、「独自の自己」という他とは異なる独自性をもった主体性の構築のプロセスを実在の人物から描き出している。セクシュアリティを軸にした自我の構築という主題自体は新しいものではなく、フーコー以後のセクシュアリティ研究の王道ともいえるが、本書の特色は、セクシュアリティやジェンダーと自己形成の関係性のみならず、それを倫理や社会道徳、社会システムなどの問題との関連のなかで論じている点にある。既存の性規範を疑問視する人々は、政治や倫理の伝統に挑戦するのか、あるいは政治や倫理の伝統に挑戦することが既存の性規範を疑問視することにつながるのか、という疑問を本書では問いかけている。本書は、その問いへの答えを明らかにしてはいないが、性規範や性的自我や自己とは何であり、その射程はどのようなものなのか、自己と道徳や社会制度との関係性はどのようなものなのか、を

私たちに考えさせるのに十分な材料を提供してくれている。

本書は、セクシュアリティと自己の形成を考察するものでありながら、セクシュアリティという主題とは関係なく、自己と道徳や社会規範、社会制度の関係性の分析として読むことができる。その意味において、セクシュアリティ研究を超えたより広い読者層の興味に応える著作といえる。一方で、セクシュアリティ研究としてみたときには、物足りなさが残ることは否定できない。というのも、セクシュアリティと自己の関係性を論じる際に避けて通ることはできない、精神分析の「性的自我」の言説や、それと筆者が重要視するルソーらの言説の効果との関係性が述べられておらず、筆者が「自己」というとき、どの次元で自己を語っているのか、本書全体を通して明確でないからである。筆者は、精神分析が提示する、無意識の次元で形成される「性的自我」と主体が自己を自覚的に再構築する「自己」の概念を無自覚に往還しているように思われる。本書が抱えるある種の「わかりにくさ」は、そこに由来するものであろう。セクシュアリティと自己／自我の構築を論じる際に、多くの研究が陥ってしまう、性的自我の形成と主体の再構築のプロセスの混同を、本書も繰り返してしまっているように思われる。

そのことと関連して、本書の最も大きな問題点は、あまりに大きな枠組みや問題設定の中で、明確な主題が見えなくなっていることだと思われる。そもそもセクシュアリティを主題のひとつとして設定する必要があったのかさえ疑問を抱かせる著作ではあるが、セクシュアリティ研究として読むか、自己をめぐる言説の研究として読むかで、本書の評価はわかれるだろう。とはいえ、セクシュアリティと自己形成の問題を、道徳や社会規範、社会正義との関係性の中で解釈しようと試みている意欲的な著作であり、本書は、多くの読者に多様な問題を提起する著作として意義があるだろう。

——明治大学他兼任講師